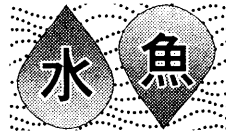


抜けるような青空、ポタラ宮殿の紅宮と白宮が朝日に輝いている。海拔3800m、中国チベット自治区ラサに入ったのが2000年の8月、国連NY本部に勤務していた時の国連ミッションである。国連がチベットへのミッション「貧困の撲滅と環境問題解決」を中国政府に申し入れてから半年以上経ったが、許可が下りなかつた。当時の



### 吉村 和就

アナン事務  
総長が北京  
政府に抗議  
し、やっと  
実現した。  
ラサ市内は

外国人に開放されていたが、その他の地は国防上の理由で立ち入りが禁止されていた。そこへ多国籍の国連ミッションが入るといって北京政府の緊張は極限に達していたらしい。「このまま許可を出さなければ国連の理事会で取り上げる」とまでアナン事務総長に言われての決定だった。  
降り立ったラサ空港にはチベッ

ト自治区のマイクロバスが横付けされ、前後は公安警察車両が取り囲み国賓並みの扱いである。国連ミッションメンバーは欧米人を中心に8人、私は上司である台湾系中国人のボス・頼さんと一緒であった。頼さんより「吉村さん、行動に気をつけなさいね」と、その意味が最初に判ったのが、ホテルに着いてからニューヨークへ電話を申し込んだ時であった。30分待たされ国連NY本部に繋がった瞬

### チベット

エリート幹部であった、つまり運転しながら、われわれの会話(英語)をすべて聞いていたのだった。私のミッションは民家の衛生状態の調査である、井戸水の水質、排水経路の確認、廃棄物処理などであった。民家でヤクの乳から作ったバター茶をいただく、最初はなじめなかつたが、「高山病に良く効く」と言われてから美味しく飲むようになった。日焼けしたチベット人夫婦のもてなし、透き通るような瞳の子供たち

ちに接していると心が洗われた。しかし、ダ

間、受話器の音が急に下がった。盗聴開始である。夜は当然、尾行が附いた。私が立ち寄った土産物屋の主人が警察に呼ばれたことを数日後に知った。  
一番驚いたのは、マイクロバスの運転手のことだった。50000mの峠を越え、ある少数民族の村に着いたが、休憩で立ち寄る途中の村落で最も歓迎されたのが、この運転手であった。なぜか？彼は欧米で教育を受けた地元共産党の

ライラマの写真を掲げている家は一軒もなかった。翌年、二度目の国連ミッションで同じ村を訪ねた。顔見知りの村長が静かに話してくれた。「皆さんが帰国されたから、われわれ村人は、公安警察に徹底的に調べられました」と……。

チベットの報道に接するたびに、鮮明なる記憶が呼び戻される今日この頃である。(グローバルウオーター・ジャパン代表)